２０２３年度 学校総合評価

６ 今年度の重点目標に対する総合評価

・ 学習活動～主体的・計画的な学習習慣の育成～

意欲があっても学習の方法がわからず、授業に積極的に関われない生徒が増えており、学びを深めたり、学びの楽しさを伝えたりする授業づくりが大切である。「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりを目指し、授業・考査等における「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に取り組む態度」の到達度目標や評価方法を生徒と共有し、その成績評価が学習への動機付けになるようそれぞれの教員が取り組んだ。６月と１２月に互見授業週間を設定し、積極的な見学を呼びかけ、ワークシートによる意見交換を行った。年 142 回（昨年 107 回）の見学回数となり、授業改善への動機付けは進んできていると思われる。次年度に向けて、「指導と評価の一体化」に向けた指導と評価基準の工夫について、実践を踏まえ、各教科・全職員での研修・授業研究を進めながら、生徒授業アンケートから生徒目線の授業づくりに取り組んでいきたい。

・ 学校生活～集団の一員としての自覚と主体的な活動で学校生活の充実を図る～

挨拶と服装に重点をおいて取り組んできたことで、校内での日常的な挨拶は概ね良好である。毎月 29 日に身だしなみをチェックする時間を設け、必要に応じて担任・学年と連携して指導している。しかし、ＴＰＯを意識した身だしなみはまだ十分にできていない。全校集会等を通じて丁寧に説明してきたい。また、スマートフォンの「依存」が問題となっており、外部講師による情報モラル教室や各クラスのＨＲ等でネットルールづくりを行い、改善への意識向上を図った。ルールの実行状況を自己評価させると、しっかりと実行できている生徒は７０％に満たず、今後はさらなる対策が必要であると考えている。

・ 進路支援～希望する進路の実現に向かう力の育成～

推薦入試では、本校の特色であるユニット指導（各生徒に担当教師を割り当て学校全体で個別指導）により、大きな成果を出せている。また就職希望者全員が希望の会社への内定を得ている。進路講座は、各学年３回以上を達成目標に掲げ、１年６回、２年６回、３年８回実施でき、各学年年３回以上の目標を達成できた。また、卒業生のアンケートから自分の進路選択に満足している生徒の割合は９８％となった。生徒が多様化する中、生徒個々に明確な進路意識を持たせ、それを維持・実現させていくために、どう指導していくか。特に推薦指導のあり方に改善・工夫の余地がある。また、これまでの知識偏重型から脱却して、思考力・判断力・表現力をいかに伸ばしていくか、本校の指導のあり方を検討する必要がある。

・ 特別活動～主体的な活動を通して学校生活の充実を図る～

様々な集団活動を通して、学び合う楽しさや達成感を高める。また、何事にも主体的・継続的に取り組み多様な人々と協同する態度を養うため、いくつもの学校行事を実施した。特にボランティア活動は、近隣自治体と連携を取り、参加生徒数は前年度より大幅に増加した。部活動の活性化のため、活動内容や試合予定とその結果を生徒玄関などに掲示したり、昼食時に放送案内をしたりすることで、全校生徒への興味関心を高める活動を行った。しかし、残念ながら部活動を３年間継続した生徒の数は減少した。生徒数が減少していく中、どう維持または変化させていくべきなのか、早急に考える必要がある。

・ 課題研究～観光ビジネスコース・自然科学コース・農業科の取り組み内容の充実～

＜観光ビジネスコース＞

大学教授等専門家や学生から、フィールドワークの手法とその実践事例を学び、新川地域をフィールドに、知る、調査する、問いを立てるなど積極的に活動に取り組んだ。活動に対する生徒アンケートでは、「地域を眺める目（見方）」が「とても変わった」「少し変わった」と回答した生徒が多かった。今年度は、越後妻有「大地の芸術祭」でのフィールドワークと黒部市美術館さんと連携して作家さんとワークシ

ョップを新たに開催した。コースの活動が３年目となり一定のカリキュラムを確立する中で、地域との結びつきが強くなる反面、学校の教育活動としてできることとできないことを整理する必要性も増えている。生徒たちが自分で町の人々と関係を結ぶ努力ができるように指導を工夫し、フィールドワークの経験を言語化する手立てを考えたい。

＜自然科学コース＞

課題研究に主体的に取り組む生徒は増えてはきているものの、まだ不十分と感じている。研究テーマを焦点化させるとともに研究時間を確保するようにしたが、テーマの設定はやはり苦労する。研究となれば教員のフォローは仕方がないが、見通しを持った計画を立てさせ、効率よく研究に取り組ませたい。ＳＮＳ（Instagram）でコースの活動紹介を行ったり、町内の商業施設に研究発表ポスターを掲示したりと広報活動は概ねうまくいった。生徒は実施した活動を通して科学を学ぶ魅力を感じており、好奇心や探究心に繋がったと感じる。また、フィールドワークは、中央植物園ＦＷと吉田科学館の湧水ＦＷと比較検討を行い継続の判断をしたい。

＜農業科＞

昨年度まで、新型コロナ感染拡大により行事の中止や縮小で行事に大きな影響があったが、今年度は以前実施していた活動にほぼ戻った。農業科は地域との繋がりも強く、地域と連携した取組みは、新聞などのメディアにもよく取り上げられており、学校評議員からも高い評価を頂いている。３年を連続した学期ととらえ、その活動に満足しているとアンケートに答えた生徒の割合が非常に多かった。地元農家に委託している実習は実施時期の検討を行う必要がある。また、スマート農業に対応した実践的な教育を行いたい。

７ 次年度に向けての課題と方策

・ 地域の核となる人材の育成を目指し、主体的な行動力と良識、責任感のある生徒を育てたい。保護者や地域の意見を汲み上げながら、地域に期待される高校を目指し、学校全体の力量を高める実効ある方策を模索したい。

・ 今後も学校評価システムを通じて、客観的データに基づいた説明責任を果たしていきたい。